

志那湖底遺跡発掘調査概要

— 志那南その2工区 —



志那湖底遺跡発掘調査概要

— 志那南その2工区 —

1987.3

滋賀県教育委員会

法人 滋賀県文化財保護協会

序

埋蔵文化財は私たちの祖先が営んだ生活の痕跡であり、大地に残された歴史資料であります。

この中には、数千年もさかのぼる縄文時代から数百年前の江戸時代のものなど、いろいろな時代に、さまざまに生きた人たちの足跡が残されています。獸を追い求めた縄文人、新しく農耕をとりいれた弥生人、古墳を築いた豪族など、埋蔵文化財はあらゆる時代の歴史をさぐる不可欠の資料といえます。

現代は、私たちの祖先の歩んだ歴史の上に立脚しており、この歴史を認識することは、私たちの日常生活をより豊かにするものと思います。しかし、埋蔵文化財調査の成果を直ちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそう容易な事ではありません。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによってはじめて面的にも立体的にもその地域の歴史を再構成することができるのです。

ここに湖岸堤建設に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたのでご高覧に供したいと思います。この一書が私たちの生活に少しでも役だつ聽となれば幸甚です。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々ならびに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

例　　言

1. 本書は湖岸堤建設事業（志那南その2工区）に伴う志那湖底遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和61年度に発掘調査を実施したものである。
2. 本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財團法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本事業の事務局は以下のとおりである。

滋賀県教育委員会文化財保護課

課　　長	服　部　正
課長補佐	出　口　宇一郎
埋蔵文化財係長	林　　博　通
管理係主任主事	山　本　徳　樹

財團法人滋賀県文化財保護協会

理　事　長	南　　光　雄
事　務　局　長	中　島　良　一
埋蔵文化財課長	近　藤　滋
調査一係長	川　中　勝　弘
同　技師	井　上　洋　介
総　務　課　長	山　下　弘
同　上任主事	松　本　暢　弘
同　嘱託	中　谷　サカエ

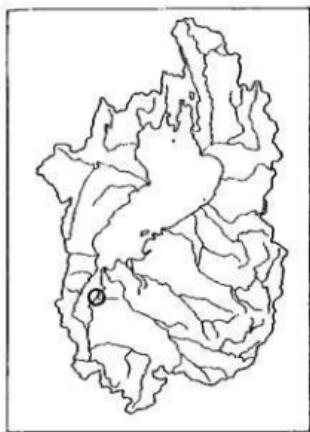
4. 本書の執筆・編集は井上が行なった。
5. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

I. 位置と環境	2
II. 調査の経過	4
III. 調査の結果	6
1. 層 位	
2. 遺 構	
3. 遺 物	
IV. まとめ	22



1. 志那湖底遺跡(縄文～古墳)
2. 七条浦遺跡(弥生)
3. 津田江湖底遺跡(縄文～古墳)
4. 烏丸崎遺跡(縄文～平安)
5. 沖田江遺跡(縄文・弥生)
6. 内畠遺跡(古墳～室町)
7. 志那中遺跡(弥生～室町)
8. 大般若寺遺跡(白鳳)
9. 石了遺跡(奈良・平安)
10. 古田遺跡(古墳・平安)
11. 皆出遺跡(弥生～平安)
12. 下物遺跡(弥生～鎌倉)
13. 片岡遺跡(弥生～奈良)
14. 花摘寺廃寺遺跡(白鳳～平安)
15. 銀音草廃寺遺跡(白鳳～室町)
16. 宝光寺遺跡(白鳳～室町)

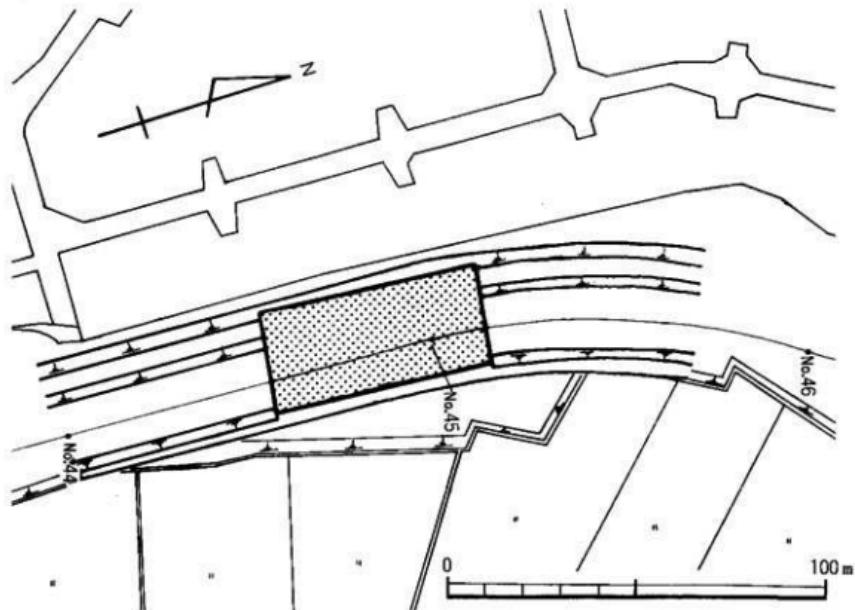
第1図 周辺遺跡分布図

I. 位置と環境

志那湖底遺跡は志那町・志那中町地先の湖辺より湖中にかけて存在する遺跡である。かねてより多くの遺物が湖辺で採取されていたが、昭和56年度より琵琶湖総合開発に伴う諸事業に先立って相次いで調査が行なわれ、縄文時代以降の各時期の遺物が出土する複合遺跡としての実態が明らかにされつつある。

今回の調査地は、遺跡の南限とされる葉山川河口の右岸部に位置し、内湖である平湖を形成する自然堤防上に立地している。この付近の沖合いでの中水調査においては、縄文時代を中心とする遺物の散布が認められ、昭和59年度に実施された試掘調査でも、沖合い400mの地点で、水面下18~20mにおいて縄文時代晚期の土器棺粋と考えられる土壙3基が検出されている。

これに対して、北に隣接する地域においては、今までに行なわれた調査の限りでは先史時代の遺構・遺物の顕著でない空白地が存在する。しかしながら志那中町地先



第2図 調査位置図

に至れば、縄文時代後期を中心とする遺物の包含層が確認されており、さらに、弥生時代中期及び古墳時代後期～白鳳期の遺構の存在する地点が続いている。この付近が志那湖底遺跡の中心の一つであり、遺跡の北限でもある。

なお北方の津田江湾でも湖底遺跡が知られており、縄文時代前期以降の遺構・遺物が検出されている。

一方、南に目を転じれば、葉山川を隔てた対岸に七条浦遺跡が存在し、昭和58年度の調査の際に標高83.2mにおいて弥生時代前期～中期の生活面が確認されている。また縄文時代最終末の突帯文土器も出土している。

以上のように志那湖底遺跡とその周辺では、各時代の遺構・遺物が知られており、今日では湖底となっている部分を含めて、人々の生活の舞台として長く利用され続けてきた地域であると言えよう。



第3図 調査前状況（東南より撮影）

＜参考文献＞

- ・丸山竜平他『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公团、1984
- ・岩間信幸・福岡正宏『志那・北山田湖底遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、1985
- ・兼康保明・奈良俊哉『志那漁港工区発掘調査概要報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、1986
- ・『滋賀県文化財調査年報 昭和五十九年度』滋賀県教育委員会、1986
- ・『昭和60年度 滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会、1986

II. 調査の経過

今回の調査地は水資源開発公团が実施する湖岸堤管理用道路（志那南その2工区）建設予定地である。このため昭和58年度に試掘調査が行なわれたが、その際に標高83.2mにおいて若干の木器が、さらに下層の標高82.7m付近では縄文時代晚期の良好な遺物包含層が確認された。この結果を受けて、南北60m、東西30mの約1,800m²の範囲を調査対象地として、今回発掘調査を実施したものである。

発掘にあたっては調査地を南北に2分し、各900m²ずつを鋼矢板で囲んで調査を行なった。表土近くの無遺物層については、試掘調査の結果に基づき、工事者側で除去したのち、4月11日より南半部（S区）の調査に着手した。調査に際しても遺物を包含しない上部の土層はバックフォーを用いて除去することとした。

なお、試掘調査の際に木器の出土をみた茶褐色腐植土層については、部分的に人力で掘削・精査を試みたところ、少量の木器を包含するのみで遺構に伴うものではないことが明らかとなつたため、一部人力を併用しながらバックフォーで慎重に掘削を進めて遺物を採集するにとどめた。

これより下層の縄文土器の包含層については、調査地のはば全域にわたって広がることが確認され、人力による掘削・精査の結果、その下面に当時の遺構面を認めるに至った。このため、遺構掘削のうち、図面・写真等によって記録化を行なった。

そのうち、トレンチを北へ拡張し、鋼矢板際の掘り残していた部分の調査をもって6月14日にS区の調査を完了した。引き続いて埋め戻しと鋼矢板の打ちかえのうち、北半部（N区）の調査に着手した。N区においてもS区と同じ様相を認め、同様の手



第4図 S区全景（東南より）



第5図 N区全景（東南より）

順で調査を実施した。ただし、N区の北東部約1/3においては縄文土器の包含層が認められなかった。N区についても精査・遺構掘削のち記録化をはかり、8月13日をもって現地調査を終了した。

III. 調査の結果

1. 層位（第6図参照）

昭和58年度に実施された試掘調査によって、上から順に黒褐色砂層・茶褐色砂層・茶褐色砂礫層の層序が確認されており、これらの土層は遺物を包含しない。このため、今回の調査においては茶褐色砂礫層の一部までを、あらかじめ除去した状態から調査に取りかかった。

第6図の2層は青灰色粘土層であり、上部には鉄分の下降がみられる。

続く3層は木器を包含する茶褐色腐植土層であり、土器を含まないため不明確ではあるが、おそらくは弥生時代～古墳時代頃に形成された層であると考えたい。4層と5層は再び遺物を含まない粘土層の堆積である。

これより下層において本遺跡の主体である縄文時代晩期の遺物の包含が認められる。6層には微量の土器を含むにとどまるが、続く7層と9層において多量の遺物が出土している。遺物包含層は自然堤防状の高まりに乗る9層と、これより南に広がる7層とに分けられる。9層の方がより多くの遺物を含むが、現在のところその内容には差違を見い出しえない。

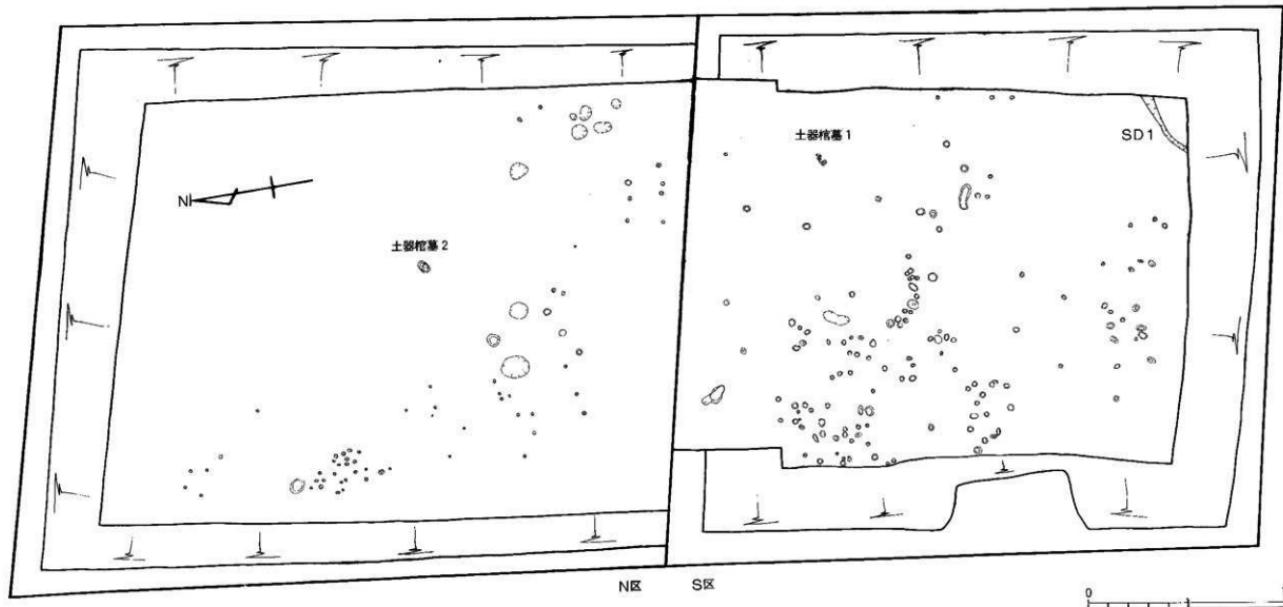
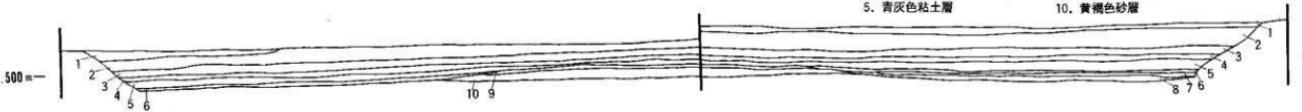
この遺物包含層を除去したところで遺構面が検出された。遺構は8層及び10層に掘り込まれたものである。なお、自然堤防状の堆積を示す9層・10層は東南～西北方向に帯状に伸びており、これより東北方には遺構・遺物は検出されなかった。

さらに部分的に深掘りして下層調査を試みたところ、青灰色砂層と暗灰色粘土層の互層を成しており、標高81.0m付近まで掘削したが遺物の包含はみられなかった。

2. 遺構（第7～11図参照）

検出された遺構には土器棺墓2基、上壙群、溝1条及び多数のピットがある。これらの遺構のうち2基の土器棺墓と土壙の多くは黄褐色砂層（10層）上に掘り込まれた

1. 茶褐色砂礫層
 2. 青灰色粘土層
 3. 茶褐色腐植土層（木器を含む）
 4. 黑褐色粘土層
 5. 青灰色粘土層
 6. 黑褐色粘土層
 7. 暗茶褐色シルト層（縄文土器を含む）
 8. 暗灰色シルト層
 9. 黑褐色砂層（縄文土器を多量に含む）
 10. 黄褐色砂層



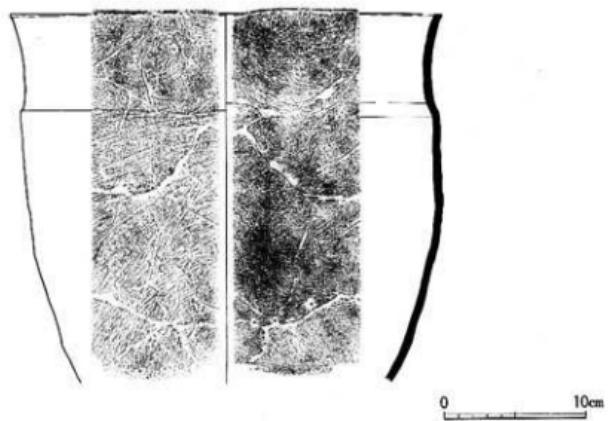
第6図 トレンチ全体図・土層断面図



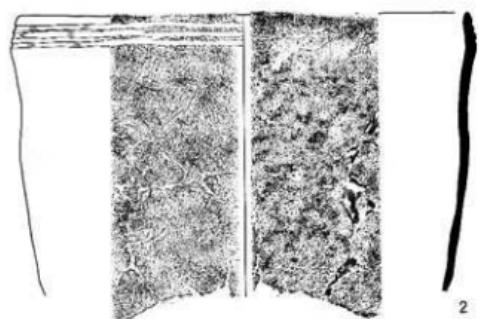
第7図 土器棺墓1



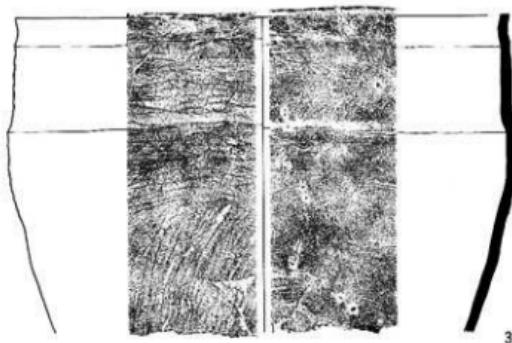
第8図 土器棺墓2



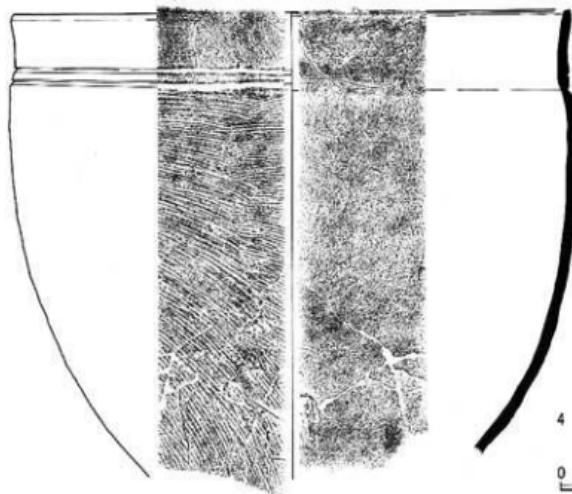
第9図 土器棺墓1-土器1



2



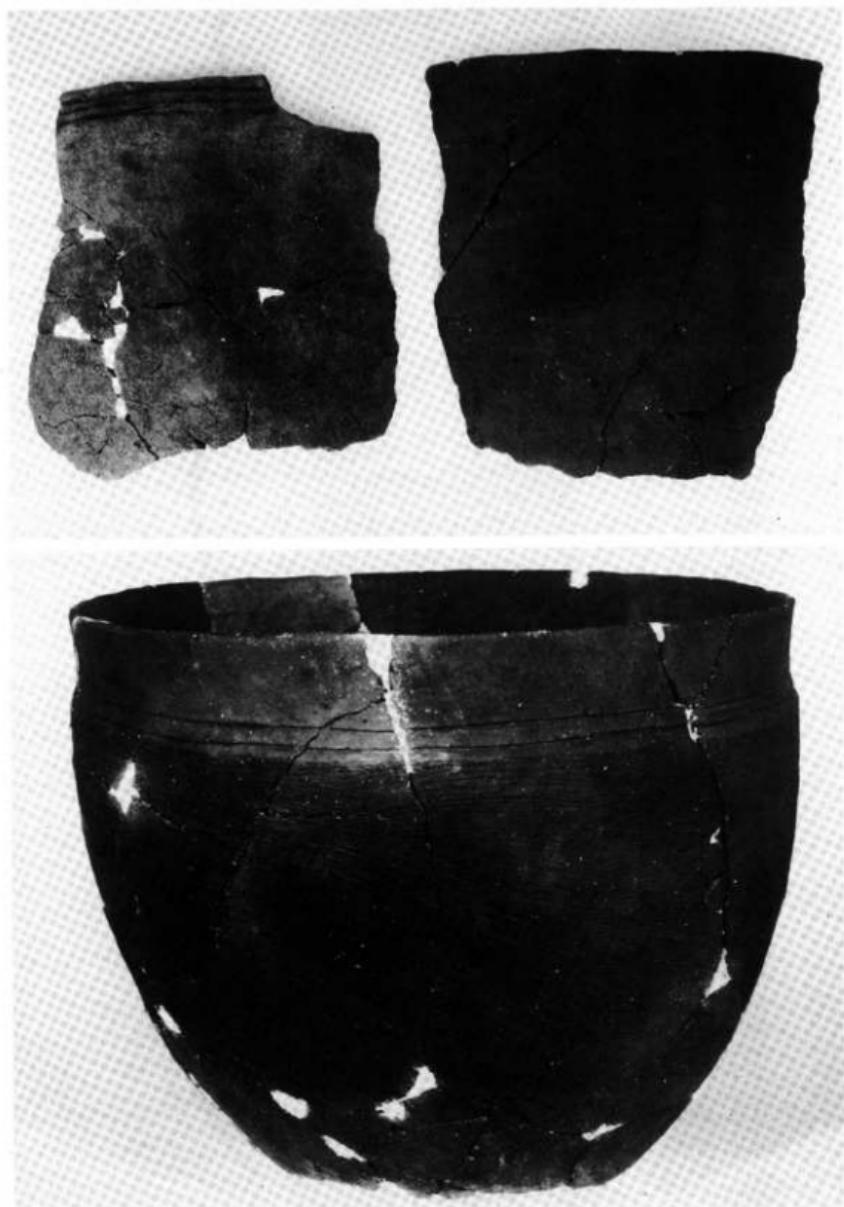
3



4

0 10cm

第10図 土器棺墓 2 - 土器 2.3.4 実測図



第11図 土器棺墓 2 - 土器 2、3、4

ものである。他の遺構は黄褐色砂層（10層）と暗灰色シルト層（8層）の上面に、散在的に分布している。

土器棺墓1は2種の深鉢形土器の底部を破碎したのち、口縁部を互いに外に向けて組み合わせた構造を成す。遺構の掘り方は不明確である。

土器棺墓1に用いられた土器については第9図に示した。土器1は口径30.5cmをはかり、頸部は横方向のナデ、胸部には削りののち二枚貝による調整も合わせて用いられている。口縁端部はナデにより面取り状に仕上げている。もう一個体の土器については焼成が甘く軟質であるため、原形を留めていなかったが、胸部は削り調整である。これらのことから土器棺墓1の年代は滋賀里Ⅲb式期に比定できる。

これに対して土器棺墓2は長径70cm、短径45cmの土壙内に3種類の土器を用いて構成されたものである。口径40cmをはかる大型の深鉢（第10図-4）の底部を破碎して横置し、土器2・3によって口縁側にフタをする形で組み合わされていたものと復元できる。

土器4の頸部には2条の鋭い沈線がめぐり、胸部外面には二枚貝条痕が顕著に残っている。内面はナデ調整である。これに対して土器2の頸部の3条の凹線は巻貝を引きずった浅いものである。外表面は同じく巻貝を用いて平滑に仕上げられたものらしく、内面は対照的にほとんど調整がみられず、砂粒でざらついている。また土器3の外側も巻貝による調整であるが、こちらは条痕の単位が良好に残り棱が目立つ。内面はやはり比較的粗いといつくりである。これらの土器は滋賀里Ⅱ式に属するものであり、土器棺墓2の年代もこの時期に比定できる。

これらの土器棺墓に対して、径70~140cmをはかる土壙群については、土壙群群としての可能性が考えられる。埋土から出土した遺物より、時期的には土器棺墓と併行するものであろう。

溝（SD1）は調査地の東南隅で検出されたが、幅20cm程度の細く浅いものであり、自然の流路であろう。

その他に多数のピットが検出された。主として径20~30cmのものであるが、残念ながら現地調査においては住居址としてのまとまりを確認しえなかった。今後の検討課題としたい。

3. 遺物

a. 木器 (第13図)

本項で取り上げる木器は茶褐色腐植土層（3層）から出土したものであり、縄文時代晩期の遺構面及び遺物包含層から出土したものではない。なお、遺構面からも加工痕を有する木片若干を採集しているが未整理である。

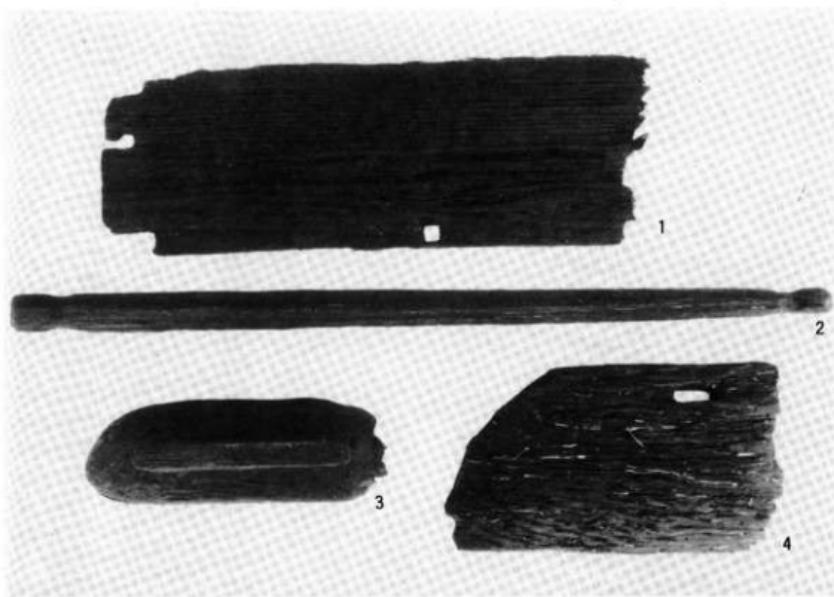
第13図の1は残存長63cm、幅22cmをはかる板材である。厚さは中央部で1.5cmであるが、長側辺際4cm程度は一面からのみ斜めに削られているため、端部では厚さ1cmとなる。破損していない側の短側辺寄りには枘穴が3個所に穿たれており、原形を残したもののは一辺2cmの方形を成している。この他、一方の長側辺寄りにも同規模の穴が1個所存在する。

2は長さ94cmをはかる完形の有頭棒である。頭部はいずれも3方向から造り出されており、一方向のみに未加工の面を有する。棒の断面形はこの面を一辺とする不整な三角形であり、最も太い部分では太さ4.5cmをはかる。

3は脚付容器がほぼ $\frac{1}{2}$ に割れたものであろう。残存長34cmは端部をわずかに欠くも



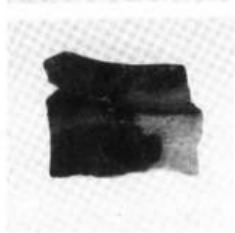
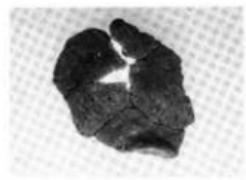
第12図 木器包含層掘削作業



第13図 出土木器



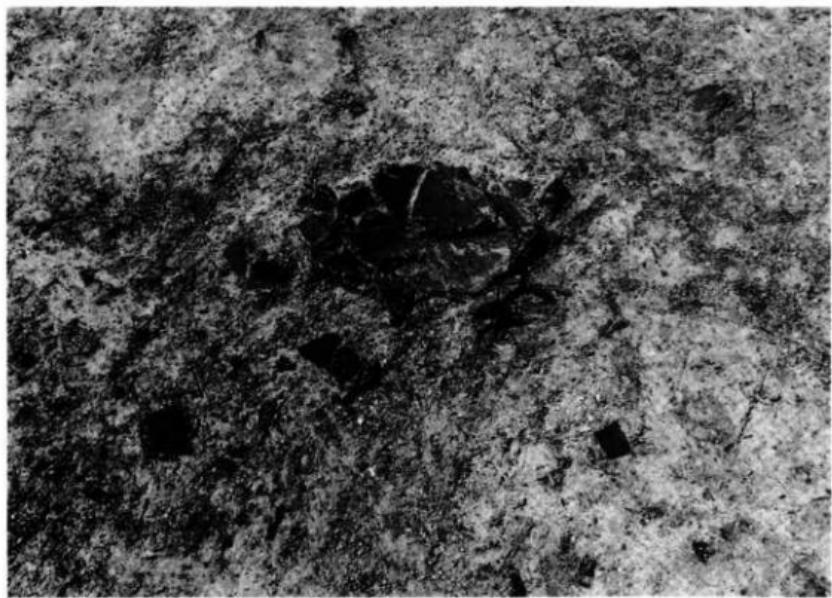
第14図 遺物出土状況（N区）



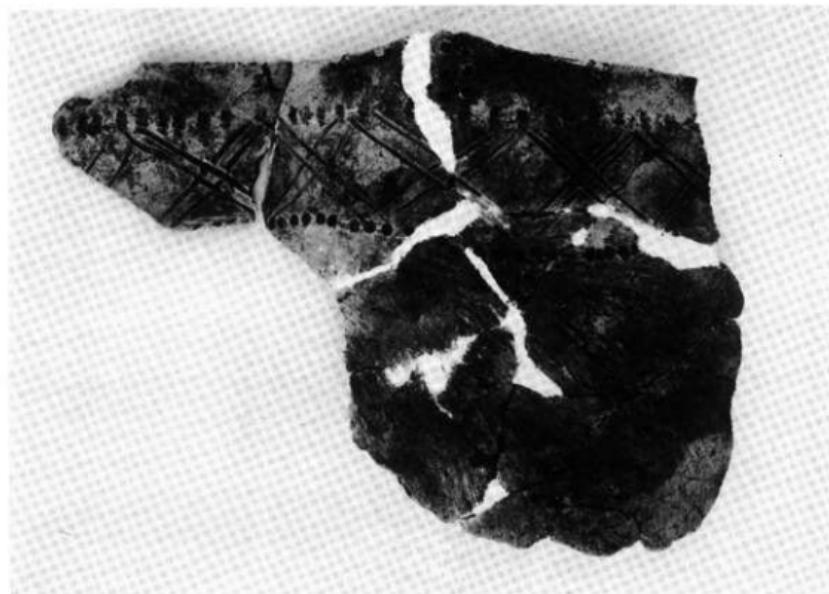
第15図 遺物出土状況（S区）



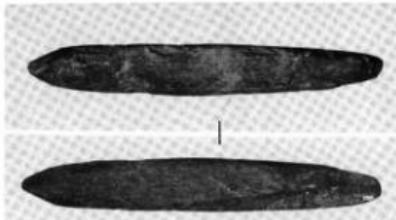
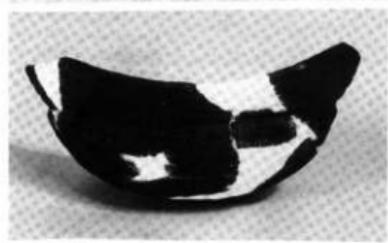
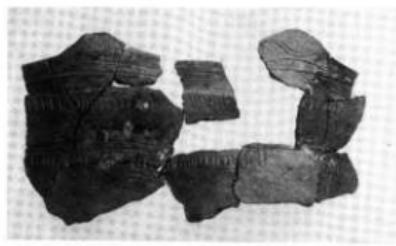
第16図 遺物出土状況 (N区)



第17図 遺物出土状況（S区）



第18圖 遺物出土狀況（S區）



浅鉢

石劍

第19図 出土遺物

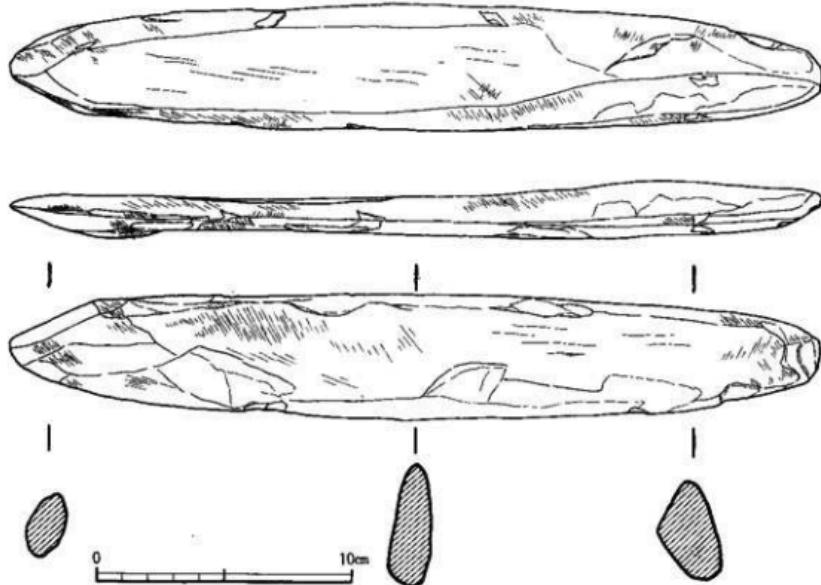
の原形でも37cm程度と復元される。残存幅は11cmである。脚部は長さ22cm、幅3cm、高さ7cmの板状を成し、やや外向きに踏ん張った形状である。台部は中央付近で厚さ3cmを超えて、端部に向かって徐々に薄くなっている。上面の削り込みは2.5cm程度と浅い。

4は船材かと考えられる残存長35cm、残存幅20cm、厚さ3cmをはかる板であり、原形を留める二辺のうち、一辺はカーブを描いている。これと隣り合うもう一辺に沿って、4.5cm×1.5cmの長方形の穴が穿たれており、板全体がゆるやかに弯曲しているのが特徴である。

これらの木製品の他、数点の加工木が同じく茶褐色腐植・土層から出土している。これらの木器の年代については現段階で決定することはできないが、試掘調査時に出土した梯子は弥生時代～古墳時代のものと考えられることから、今回出土した木器もこれを前後する時期のものとしておきたい。

b. 土器（第14～19図）

今回の調査において出土した土器は、縄文時代晩期の滋賀Ⅰ～Ⅲb式期のものに限られる。明確に遺構に伴うものは既述の土器棺の他にはほとんどなかったが、多くの良好な遺物が出土しており、その成果については今後の整理調査に待たれる。



第20図 石器実測図

c. 石器（第19～20図）

石器の出土量は総じて少ない。図に示した石剣は全長32cmをはかる。両刃の形態を成すが刃部は鈍く、全般に作りが粗雑である。石材については現在のところ明らかではないが、良好な石材を用いたものではない。なお、この石剣は使用痕を有しており、未製品ではない。滋賀里Ⅰ～Ⅲb式期の土器と同一の層位より出土したものである。その他の石器には石鏃・叩き石などが見られる。サヌカイトのチップも出土している。

＜参考文献＞

- ・辻昭三他「湖西線関係遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会、1973
- ・家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4、雄山閣、1981

IV. まとめ

今回の調査において茶褐色腐植土層から出土した木器の位置付けについては、この層からは多量の自然木片も出土している一方で、土器は全く出土しなかったことなどから想像をたくましくすれば、湖岸の葦原に標着した木片が自然に集積したものであろう。

これに対して縄文時代晩期の層については、当時の遺構面も確認され、人々の生活の一端を伺い知ることができた。この遺構面の広がりは自然堤防状の高まりに沿って西北～東南方向へ伸びると考えられる。昭和59年度に沖合400mで確認された同時期の土器棺墓群と合わせて、当時の大規模な生活址が考えられるのであるが、前浜部分の試掘調査においては若干の縄文土器片を得たのみであるなど、その連続性については不明な点もある。周辺部の調査結果と合わせて今後検討していきたい。

昭和 62 年 3 月

志那湖底遺跡発掘調査概要

— 志那南その 2 工区 —

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目 1-1
電話 0775-24-1121 内線 2536

助成賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大堂町 1732-2
電話 0775-48-9781

印 刷 所 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻 4-20